

嫌われオメガは死に戻った世界で
ベータに擬態する

なかしま ゆう み

中島佑美 28才・Ω

国民的人気女優。映画『空を見上げて』のヒロイン。
三間と同じアプローズに所属していたが、一年前に独立。

いな がき りょう ま

稲垣諒真 24才・α

三間と同じ事務所の後輩。
映画で夏希や三間と共演する。
大卒で夏希と同じ俳優二年目。

つきしろ とも や

月城朋也 30才・α

夏希が所属する月城プロダクションの専務。
夏希をスカウトした人物。

かた ぎり ただ ゆき

片桐忠之 30才・β

三間が所属する
アプローズプロモーションの社長。
月城とは高校の同級生。

しら き せい や

白木誠也 27才・β

二度目の人生で新たに
夏希のマネージャーとなった人物。

kirawareΩ ha
shinimodotta sekai de
βni gitaisuru

Characters

み ま はる ひと

三間晴仁 26才・α

実力派人気俳優。一度目の人生で
夏希の予定外の発情期に
巻き込まれ、関係を持つ。
女優・中島佑美との交際が噂されて
おり、映画『空を見上げて』でも
恋人役を務める。

かきたになつき

柿谷夏希 20才・Ω

俳優二年目。一度目の人生で
三間の子供を身こもるが、
階段から突き落とされて死亡。
死に戻ってからはベータと偽り
事務所と契約した。

目次

嫌われオメガは死に戻った世界でベータに擬態する

7

番外編 三間晴仁の憂鬱^{ゆううつ}

331

嫌われオメガは死に戻った世界で
ベータに擬態する

プロローグ

長い夢を見ていた気がする。

意識が徐々に浮上し、ふと気づけば、暗闇の中を歩いていた。

一筋の光もない真っ暗闇なのに、不思議と怖くなかったのは、手を引いてくれる人がいたからだろう。手というか、正確には人差し指だけだ。それを包み込んでるのは、あたたかく、ぷにぷにとした柔らかい掌で、明らかに子供の手だった。

僕には子供の知り合いはいない。最近はずいぶん子供と共演することもなかったはずだ。

記憶を遡り、一つ思い出したことがある。ここに来る前の、覚えていた限りで最も新しい記憶だ。僕はあのひとを、人目につかないよう、テレビ局の非常階段に呼び出したんだった。

先に着いた僕は、非常階段の踊り場に立って待っていた。

ドアが開く音がして、振り返ろうとしたら、勢いよく背中を押されて……。咄嗟に身体を捻り、何かにしがみつこうと伸ばした両手は、ただ宙を泳いだだけだった。

落下しながら見たのは、僕を見下ろす、サングラスとマスク、それに野球帽を身につけた男の姿だった。アルファ然とした立派な体格は、あのひとだったようにも思える。

彼は手を差し伸べることもせず、真っ逆さまに下の階へと落ちていく僕を、ただ冷ややかに見下ろしていた。

直後、強い衝撃が頭蓋を貫き、視界が裏返った。頭をかち割られたかと思うような激しい痛みが眼の奥や首にまで広がる中、いつのまにか意識を手離していた。

覚えていた色のついた光景は、それが最後だ。

あれからどのくらい時間が経ったのかわからない。気がついたら、こうして暗闇の中を、子供に手を引かれ歩いていた。あまりにも真っ暗闇で、最初、自分が目を閉じているのかと思って、試しに空いているほうの手で瞼を触ってみたくらいだ。

きっと、僕は死んだのだろう。

星一つないこんな真っ暗闇、見たことないし。さつきからしきりに足を動かしているのに、足裏に地面を踏みつける感覚がしない。それに何より、どこも痛くない。あれだけ勢いよく階段から落ちたのだから、生きていたらどこかしらが痛いはずだ。

既に死んでいるのだとしたら、手を引いてくれているこの子は、天使か、もしくは子供の死神か。死を実感し、胸に苦く込み上げてきたのは、後悔の念だった。

呼び出さなければよかった。

妊娠していることがわかり、相談するためにあのひとを呼び出した。

相談したところで、面倒に思われるだろうことはわかっていた。「堕ろせ」と言われるのなら、それでもよかった。自分では決心がつかないから、憎まれていることを実感できれば、踏ん切りが

つくかもしれないと思った。

でも、今ならわかる。

本当は、中絶の後押しがほしかったわけじゃない。

ただ、会いたかっただけだ。

このまま芸能界を去るになれば、もう二度と会えなくなるから。最後にもう一度だけ、面と向かって話をしたかった。

でも、まさか殺意を抱かれるほど憎まれていたとは。死と引き換えにその事実を知らされるなんて、神様はあまりにも残酷だと思う。

恨みがましく思うと同時に、一つの気がかりが胸をよぎった。

——ねえ。

前を歩く子供に声をかける。

——どうして僕一人なの？ 僕以外に、赤ちゃんいなかった？ たぶんまだ卵みたいな形だけど。産婦人科で見せてもらったエコーの画像を思い返す。

人間の形はしていなくても、確かに、僕のお腹の中に別の命がいた。あの子はどこに行ったのだろうか。

もし、死んだときの形を保っているのなら、小さすぎて気づけなかったに違いない。きつと、あの踊り場の真下に、一人取り残されているのだろう。

小さな小さな魂が、迷子の子供みたいに、泣いて僕を探しているような気がした。

指を引く力は、ゆるむ気配がなかった。

——らいじょーぶ。

足元近くから、舌つ足らずな声が返ってくる。何が「大丈夫」なのかはわからない。

——いるから、らいじょーぶ。すこしいなくなるけど、またママのところに行く。

やはりその言葉の意味は、僕には理解不能だった。

「ママって、もしかして僕のこと？」と聞こうとしたが、「あそこ」という言葉に遮られる。指を前へと引いていた力がふいになくなり、足を止めた。

暗闇の中で、初めて黒以外の色が見えた。虫眼鏡で太陽光を集めたみたいに、前方の何か所だけが仄かに丸く光っている。

——あとはママがひとりですって。

——え？ あそこがあの世の入り口ってこと？ 行くなら僕の赤ちゃんも一緒に……

——じかんがないから、ママはさきにもどって。

「ママは先に戻って」ということは、赤ん坊を迎えに行ってくれるということだろうか。

きゅつと、一度強く指を握り込まれたと思ったら、すぐに掌が離れていった。

——らいじょーぶ。ママがママらしく生きていたら、きつと、またあえる。

その言葉を最後に、漠然とした喪失感だけを僕の胸に残して、子供の声も、気配も消えた。小さな子供の手だったのに、それがなくなった途端に、急に心もなくなった。

真つ暗闇の中を一人で歩くのは怖い。

できれば、あの案内人の子供と赤ん坊を待つて、一緒に行きたかったけど。あの子が言い残した言葉も気になっていた。「時間がないから先に戻って」と、確かにそう言っていた。

僕の中にも、何かに突き動かされるような感覚があった。理由はわからないが、いち早くあそこに行かなければならないことは、本能的にわかる。

これ以上ここで待つても、あの子には会えないことを確信し、僕は再び前を向いた。

——らいじょーぶ。ママがママらしく生きていたら、きっと、またあえる。

耳に残る舌つ足らずな言葉に背中を押され、光に向かって歩き出した。

第一章 二度目のはじめまして

街路樹がイルミネーションで彩られ、そこかしこにクリスマスソングが溢れる師走某日。民放テレビ局の一つであるここ東和テレビの局内も、普段以上に慌ただしいながらも、どこか浮足立った空気が流れていた。そんな中、僕一人がこの世の終わりのような顔をして、せわしく人が行きかう通路の端に佇んでいる。

テレビに出ることを生業とする者にとって、十二月は稼ぎ時だ。各局で年末年始の特番が組まれるため、さして知名度の高くないタレントや芸人にも数合わせで声がかかる。かく言う僕、柿谷夏希もその一人だった。

俳優二年目の今年は、いくつかオーディションを勝ち取ってドラマで重要な役をもらい、そのおかげで系列局放送のNG場面を集めた特番——いわゆる『NG大賞』への出演オファーをもらった。今日はこれから、その収録が行われる。

NG大賞というのは、役者にとって嬉しい賞ではないが、年末特番に呼んでもらえただけ、大躍進の一年と言っている。そもそも去年は、ほとんど台詞のない端役ばかりだった。

よって、今、僕がこの世の終わりのような顔をしているのは、この後の収録が原因ではない。その前にやり遂げなければならない重要任務のせいだった。

「夏希君。そろそろ行かないと、ヘアメイクの時間がなくなっちゃうよ」

隣に立つマネージャーの白木誠也が痺れを切らし、五分ほど廊下に突っ立ったまま微動だにしない僕に、控えめに声をかけた。

白木さんは眼鏡をかけた柔和な顔立ちで、見た目通り人当たりがよく穏やかな性格だ。年は僕より七つ年上の二十七才。やるべきことをやっている分には小言を言われることはない。

その白木さんが珍しく急かすくらいだから、本番まで時間がないことは確かだ。

僕だって、できることなら嫌なことはさっさと済ませて早く楽になりたい。だがいっかんせん、金縛りにあつたように体が動かないのだ。

「そんなに緊張するなら、無理して今日挨拶しなくてもいいんじゃない？ 来月の顔合わせのときに、『先月はご挨拶に伺えず、すみませんでした』って謝れば、失礼にはならないよ」

自分を鼓舞してここまで来たものの、白木さんの言葉に覚悟が揺らぎ始める。

共演者やスタッフへの挨拶は、二度目の俳優人生で自分自身に課したことのひとつだった。だが、今日のこのNG大賞は、番組ごとに出演者が自分たちのNG映像にコメントする形式で、他の番組の出演者との絡みはない。本来なら、楽屋挨拶は、同じ番組の出演者と司会者だけでいいはずだ。そちらは僕の楽屋とも近く、ここに来る前に既に済ませている。

ここにいるのは、個人的な理由が大きい。

NG大賞の出演者リストに、次に共演予定の俳優の名前を見かけたため、ついにて挨拶しておこうと思ったのだ。できることなら関わりたくない相手だったので、早めに会って苦手意識を失くしておきたかった。このままだと役に入り込めず、台本を読むのにも支障が出そうだったから。

しかし、実際に楽屋のドアに掲げられたその人の名前を見ると、足が竦んで一步も動けなくなった。喉の奥がひりつき、みぞおちがじわりと重くなる。失敗の許されない長回しや一発撮りのときでさえ、これほど緊張したことはないのに。

この調子だと、楽屋を訪ねたところでまともに挨拶すらできなさそうだ。ひとまず今日のところは諦めよう。そう思ったとき――目の前のドアが開いた。

むせかえるような甘い香りが鼻をつき、一瞬息を止める。

高級そうな香水と、それとは異なるオメガ特有の甘やかな香り。そして、そこにかすかに混じる、懐かしい香り。けれど、胸を掠めたその懐かしさは、すぐに鋭い痛みへと塗り変えられた。

茫然と立ち尽くす僕の前に現れたのは、この楽屋の主ではない。

女性だった。しかも、文句なしでこれまで見てきた中で最も美しい。

実際に会うのは初めてだが、知らない人はいないほどの有名人、大人気女優の中島佑美だった。

上半期のCM出演数は女性タレントナンバーワンで、CM女王とも呼ばれている。僕が次に出演する予定の映画『空を見上げて』のヒロイン役でもある。

「あら」

艶やかな黒髪がさりげないしぐさで耳にかけられ、片手で掴めそうなほど小さな顔の輪郭が露わになる。ほっそりとした上品な鼻筋に、桜色に潤んだ唇。長い睫毛に縁取られた彫りの深い大きな目はくっきりとした二重で、照明の光を映した瞳は、青みがかった黒にもグレーにも見える。その複雑な色合いも、透けるように白い肌も、日本人離れしていて、確か父親がイギリス人だと、事務所のホームページのプロフィール欄に記載されていたことを思い出した。

前にテレビで見たときはもっと明るい色でやわらかくウェーブしていた髪が、今は役作りのためかストレートの黒髪になり、肩のところで切り揃えられている。

テレビと異なるところがもう一つ。首にはオメガ用の黒いチョーカーが巻かれていた。それはタイトな黒いドレスとともに、彼女の肌の白さと華奢な体のラインを際立たせている。背はそれほど高くなく、ヒールを履いても、一七〇センチの僕より目線が少し下にくるから、一六〇センチくらいだろう。

「あなたは確か、次の撮影で一緒にさせていただく……」

白木さんが茫然とする僕の脇腹を軽く肘で小突き、慌ててスーツの内ポケットから名刺入れを取り出す。僕を押しつけるようにして彼女に差し出した。

「月城プロダクションの柿谷夏希です。来月から『空を見上げて』で一緒にさせていただきますので、よろしくお願いします」

僕はというと、目の前で起こっていることに対して現実感が湧かず、名刺を渡す白木さんの丸まった背中をぼんやりと眺めていた。

そもそも、なぜ彼女がここにいるのだろう。NG大賞の出演者リストには彼女の名前は載っていなかった。東和テレビの他のスタジオで撮影があつて、その合間に彼に会いに来たのだろうか……彼女とこの楽屋の主は、以前から恋人同士だと噂されている。

名刺を受け取った彼女は、名刺の持ち合わせがないことを謝罪し、僕に上品な笑顔を向けた。「晴のところに挨拶に来たんでしょ？　ごめんなさいね。邪魔しちゃつて」

二年ぶりに耳にしたその呼び名が、テレビの前の視聴者気分だった僕を、現実へと引き戻した。……はるさん……。そうだ……。僕はあの人に、挨拶に来たんだった。

そのとき、ふいに、彼女の背後に人影が射した。

開けつばなしだったドアの奥から現れたのは、彼女より頭二つ分ほど背の高い男性だった。

周囲のざわめきが急に遠ざかり、時間が止まったかのように錯覚する。

——三間晴仁。

彼もまた次の仕事の共演者で、彼こそがこの楽屋の主だった。

一九〇センチ近い長身にしなやかな筋肉を纏った体軀は、ただ立っているだけで圧倒的な存在感を放っている。男らしくずっと通った鼻梁に、酷薄そうな薄い唇。切れ長の目はわずかに目尻が上

がり、鋭い眼差しはテレビで見る以上に迫力があつた。

心臓が激しく胸を叩き、鼓膜にまで音を響かせる。喉がぐつと締めまり、うまく息を吸えなくなつた。

僕より六才年上の実力俳優である彼とは、今回の人生では、今日初めて顔を合わせる。

あれもこれも、すべてリセットされて、この世界ではなかったことになっているはずだ。そう自分に言い聞かせても、異常とも言える体の反応が、現実を突きつけてくる。あれから二年以上も経っているのに。自分の中の一部が未だにあの非常階段から動けずにいることを、否応なく思い知らされた。

血の気が引き、ふらつきそうになる体を咄嗟に壁に手を付いて支えた。

三間が彼女の肩越しに、低頭する白木さんに目礼する。その視線がこちらに向かう気配に、僕は慌てて顔を俯かせた。伏せた視界の隅を、彼の袖口を引く色白の指がちらりと掠める。

「晴。次、共演予定の柿谷君が挨拶に来てるよ」

ごく自然なそのしぐさが、一層、僕の心を掻き乱した。

上質な香水に混じるかすかな甘い香り。それを包み込むような仄かなアルファの香り。香水以外は、おそらく僕のように鼻が利く者でなければ気づかない程度だろう。けれど僕にとっては、息苦しさを覚えるほど強烈な匂いだった。

早くこの場から離れないとまずい。直感でそう思った。

「あ、あの……。はじめまして。柿谷夏希です。『空を見上げて』では、お二人ともよろしくお願

います。収録の準備があるので、今日はこれで失礼します！」

顔を俯^{うつむ}かせたまま腰を九十度に折り、それだけ告げると、二人の顔を見ずにその場から走り去った。

「夏希君ってホント美肌ねー。まるで赤ちゃんみたい。クマさえなければ、今日もノーファンデでいったのにい。ドラマの撮影が終わっても、まだ忙しそうね」

メイクの最中、会話を振られ、ゆつくりと目を開けた。鏡越しに、下地を塗ってくれているメイクのミカさんと目が合う。

この局の専属ヘアメイクアーティストである彼女は、黒髪をすっきりと頭頂部にまとめたお団子ヘアがトレードマークだ。カラコンやふさふさのマツエク、濃いめのチークは年齢を感じさせない華やかさがあるが、スタッフの話では、局には十年以上勤めているらしい。軽快なトークを交わしながらもメイクの手つきは早く、丁寧で、出演者からの信頼もあつい。僕もドラマの撮影中はいつもお世話になっていた。

彼女が言うように、鏡に映る自分は、両目の下に濃いクマができていて、顔色も悪い。

「まあ、おかげさまで……」

理由を正直に話すわけにいかず、鏡越しに曖昧な笑みを浮かべてみせた。

クマの理由は、仕事の忙しさではない。三間に挨拶に行くことを考えると、不安と緊張でなかなか寝付けなかったのだ。

しかし、そこは人気ヘアメイクの腕の見せどころのようで、疲れの滲^もむ蒼白な顔が、ファンデーションによって明るく健康的な肌色に塗り替えられていく。

「あとは眉を整えるくらいでいいわね。夏希君みたいにパーツが完璧だと、楽でいいわ。これでベータなんだから、神様はホント不公平よねー。性別で差をつけるんなら、同じ性別の中でくらしいスペックを平等にしてほしいものだわ」

ミカさんの愚痴に内心ドキッとしたが、そこは僕も俳優の端くれ。鏡に映る顔は眉一つ動かさず、ポーカーフエイスを貫いていた。

ミカさんも本気で愚痴っているわけではなく、彼女なりのリップサービスなのだろう。褒め上手なところも、人気の理由の一つだ。

「でも、僕、ベータなのに運動神経鈍いし、筋トレしても筋肉がつかないから、これといった売りがなくて。今のところオーディションに受かるのも似たような役ばかりです」

ベータであることをさりげなく強調し、嘆いてみせると、ミカさんは眉尻を下げ、少し困ったような笑みを浮かべた。

「この業界だと、整ってるほうが埋もれちゃうもんね」

芸能プロダクションの専務に直々にスカウトされたのだから、僕も顔立ちは世間的には“整っている”部類に入るのだろう。くつきりとした二重の切れ長の目は他人の視線を引きやすく、ずっと

通った鼻筋と薄い唇は、女性スタッフに羨ましがられることも少なくない。

ただ、芸能界には僕クラスなら掃いて捨てるほどいる。容姿だけで仕事をもらえるほどの突出したものは何もない。ベータとして生きる決めてからは、イメージに合わない諦めていたアクティブな役にもチャレンジしようと筋トレやランニングにも取り組んでみたが、今のところ目に見える効果は出ていない。

喋っている間に凛々しい眉が描き足され、メイクをしないと中性的に見える顔が、それなりに男らしくなった。

ノックの音がし、鏡の端に映っていた部屋のドアが開く。入って来たのはマネージャーの白木さんだった。

「二人には、来月の顔合わせのときに改めてご挨拶に伺いますって言っておいたから」
喋りながら近づいて来る彼に、鏡越しに「すみません」と謝罪する。

「三間さんが、『なんであいつはこの仕事を選んだんだ？』って言ってたから、来月会ったときに、ちゃんと自分で説明してね」

「え？ あ、はい……」

僕の返事が曖昧だったせいかわ、白木さんが一瞬怪訝そうな顔をしたが、それ以上は何も言われなかった。

聞きたいのは僕のほうだ——と胸の内を呟く。

なぜ、あの人がこの仕事を受けたのか。

あのひととの共演を避けるために、今回はこの映画を選んだというのに。

「二人って、もしかして、三間君のところに佑美ちゃんが来てたってこと？」

僕の背後に立ち、色素の薄い髪をワックスで無造作にセットしながら、ミカさんが目を輝かせる。三間晴仁と中島佑美の逢瀬は、週刊誌で何度もスクープされている。「二人」と聞いてすぐに彼女のことだとピンと来たようだ。当人たちは熱愛報道を肯定も否定もしていないので、真相はわからないが。

「わざわざ楽屋に呼びつけてマーキングなんて。三間君、クールに見えて意外と独占欲が強いからねー」

「マーキング……ですか？」

やめておけばいいものを。聞き慣れない言葉に、つい問い返してしまった。

ミカさんが、うふ、と意味深な笑みを返す。

「だって、いくらチョーカーをしていても、佑美ちゃんを狙ってるアルファは腐るほどいるでしょう？ 自分の匂いをつけて他のアルファに付け入る隙を与えないようにしてるのよ」

彼女からかすかに三間のフェロモンの香りがしたのは、そういうことだったのか。

また、胸にツキンと刺すような痛みを覚え、だからなぜ、あの人のことで僕が傷ついたみたいになっただ、と自分自身を殴りたくなった。

「あーあ。あたしがオメガだったなら、ヒートトラップ仕掛けて三間君をものにするのにいい！」

ミカさんが地団太を踏むように悔しがる。無意識に、ふっ、と苦笑を漏らしていた。

「あ、ちょっと、夏希君！ 今、あたしのこと鼻で笑ったわね？ 自分が勝ち組のベータだからって！」

ミカさんは、毛束をふんわりと浮かせていた僕の髪を、ぐちゃぐちゃにしそうな形相だった。

「ち、ちがいます！ 恋する乙女なミカさんが可愛かったから、微笑ましくて笑ってしまっただけですよ」

「あら、そうお？ じゃあ、番組のSNS用に、三間君と夏希君のツーショット写真で許してあげ・る」

鏡越しにウインクされ、僕の頬がひくりと引き攣る。

「な、なんで、僕と三間さんのツーショット写真なんて……」

「目の保養と局の宣伝のために決まってるじゃない」

収録の合間にスタッフに撮ってもらえと言っているのだろうか。それはあまりにも、代償のハードルが高すぎないか？

断る言い訳を必死に考えていると、ノックの音がし、ドアが開いた。

「柿谷さん、そろそろスタンバイお願いします」

顔だけ覗かせたADさんに、白木さんが「すぐ行きます」と返事をする。期待の眼差しで見送るミカさんに礼を言い、楽屋を出た。

ミカさんの言葉に思わず苦笑を漏らしたのは、彼女のことを小馬鹿にしたからではない。自嘲だった。たとえオメガでも、ヒートトラップで三間をものにすることはできないことを、身をもっ

て知っているから。もし、あれが現実を起こった出来事なら、の話だが。

おそらく僕は、この二年の間、一度通り過ぎたはずの月日をもう一度辿っている。

テレビ局の非常階段から突き落とされ、自分はここで死ぬんだと思った。けれど、目が覚めたら、二年前に時間が巻き戻っていたのだ。

僕の父は、僕が小学生の頃に借金を残して蒸発した。

美容師だった母はオメガでもともと体が弱く、父の借金を返すために働き詰めだったこともあり、僕が高校三年生のときに病気で他界した。

母の兄である伯父が後見人になってくれたが、「通学に時間がかかるから」という理由で、母と住んでいた都営アパートで一人暮らしするよう言われた。世間体を気にしてか、児童養護施設に入ることも遠回しに反対されたが、だからといって金銭的援助をもらえるわけでもなかった。

伯父には大学生の息子と娘がいる。引き取らなかつたのは、おそらく僕がオメガだからだろう。人には男女の性別に加えて、アルファ、ベータ、オメガという第二の性がある。

アルファは生まれながらに身体的にも能力的にも優れた人間が多い。人口の大半を占めるベータは、第二の性に左右されにくく、能力も平均的。最も少ないオメガは、小柄で様々な能力が平均より劣ることが多く、男でも妊娠できるという特殊な体質を持つ。三カ月一度訪れる発情期では、フェロモンという甘い香りを発し、男女の性別に関係なくアルファやベータを誘惑する。そのせいで、オメガは社会的に厄介者扱いされている。

母の生命保険は医療保険がメインで死亡保険は少額の設定だったため、医療費と葬式代を払ったら、ほとんど手元には残らなかった。

高校進学と同時にコンビニのバイトを始め、大学進学のために貯金していたので、当面はそれを授業料や生活費にあてるしかなかった。バイトは、高校生の場合、午後十時までと就業時間が制限されており、土日も最長八時間しか働けない。その上、三カ月に一度の発_ト情_ト期の間は一週間ほど休みが必要になる。貯金は減る一方で、大学は早々に諦めたが、その後の就職活動もうまくいかなかった。

高卒のオメガに、世間の目は厳しい。就職活動を始めて、改めてその現実を突きつけられた。履歴書の性別欄は任意項目だが、配属や勤務形態を決める上で必要だからと、面接では必ず第二性別を聞かれる。夏から就職活動を始めて、秋に受けた二次募集でも不採用の返事をもらった段階で、母のように手に職をつければ就職先もあるかと考え、美容師を目指すことにした。

しかし、働きながら夜学美容専門学校に通うにしても、入学金を工面する必要がある。伯父への借金は当然断られた。バイトの時間を少し増やしたところで、すぐに稼げる金額でもなかった。思い悩んだ末に、僕は「パパ活」といった類_{タガ}のものに手を出そうとした。

それまでも、男女問わず怪しい人に声をかけられることはよくあったので、自分が性的な欲望の対象にされやすいことは知っていた。実際、それ系のアプリにオメガの男として登録すると、すぐに何件か誘いが来た。その中から「まずは食事デートからどうですか？」とメッセージを送ってきた比較的安全そうな人を選んで、会うことにした。

そんなとき、学校帰りに、現在の所属事務所である月城プロダクションの専務にスカウトされたのだ。

事務所に所属すれば、チラシのモデルくらいならすぐに仕事を回せるし、モデル代は日払いでくれるという。モデル代はコンビニのバイト代よりはるかによかったし、パパ活よりは安全に思えた。

結局、アプリの相手には会うのを断り、翌日に事務所に話を聞きに行き、練習生として仮契約を結ぶことにした。

その後、ミュージックビデオの仕事をつきかけに演技に興味を持つようになり、美容学校に行くのはやめて、高校卒業後は俳優を目指すことにした。

もともと人見知りで引込み思案だったのが、中学で受けた検査でオメガとわかって以来、オメガだと気づかれるのが怖くて、余計に人との接触を避けるようになった。そんな自分に人前に出る仕事を務まるか不安だったけど、母が忙しく、友達も少なかった分、子供の頃から学校や家でよく本を読んでいた。物語の世界に入り込んだり、書かれていない背景に思いを巡らせたりすることは好きだ。与えられた役を、その人がどんな人生を送ってきたてどんな考え方をする人なのか、想像しながら演じる役者という仕事に、魅力も感じていた。

スカウトしてくれた月城専務が、事務所でのレッスンの合間にわざわざ声をかけてくれて、目をかけられているのがわかるのも、励みになった。

社長の息子である専務は、僕より十才年上で、出会った当初は二十代だった。専務という地位にいるにもかかわらず、現場にもよく顔を出している。自身でもモデルや俳優が務まりそうなほどに

容姿に恵まれていて、見るからにアルファなのに、他のアルファのような威圧感はない。それに、少し目尻の下がった目元からは甘い印象を受け、誰に対しても物腰が柔かい。

そんな誰もが懂れる雲の上の存在から声をかけられるたび、僕は舞い上がってしまって、まともな受け答えもできなかった。

『メディアに出るときは、柿谷夏希というタレントを演じればいい』

専務がそう言ったのは、僕のコミュニケーション能力があまりに壊滅的だったからだろう。

僕は真顔だと、取り澄ましていて人を小馬鹿にしているように見えるらしい。カメラの前では常に笑顔を絶やさず、共演者との親密ぶりをアピールしたほうがいい、とも言われた。

バラエティの仕事が増えてからは、キャラ作りの参考として、最近はあまりテレビで見かけなくなった先輩タレントの動画配信チャンネルを紹介された。モテ方や恋愛テクニクを伝授する系のものだ。

そのおかげで、それなりに人気も出て、雑誌モデルからバラエティにも呼ばれるようになり、順調に俳優の仕事も増えていった。世間の人たちからは「あざと可愛い系小悪魔男子」と呼ばれるようになり、俳優二年目にして、初めてドラマの主演に抜擢されたが、人気に実力が伴っているとは言えなかった。それに、四六時中、演技を続けることは難しい。反動で、キャラを作ることに疲れてしまい、カメラの前とは真逆に、普段は自分から他人に話しかけることもなかった。

外では視聴者に媚び、内では自分の殻に引きこもる。回を重ねるごとにドラマの視聴率が下がっていったことで余裕を失くし、そんな僕の二面性は更に酷くなったようだ。そのせいで、共演者や

スタッフからの評判は悪かったらしい。

そのことを教えてくれたのも、あの人——三間晴仁だった。

「では、本番行きまーす！ 五秒前！ 四！ 三！ ……」

ADさんのカウントダウンが始まる。視線を感じた気がして、ふとそちらへ目を向けた。

ひな壇の少し離れた場所にいたのは、他の番組の出演者たちだ。その中には三間もいる。

彼がこちらを見ていたはずはないから、視線を感じたのは気のせいだろう。

三間はカメラが向いていないところでも背筋がぴんと伸びていて、相変わらず姿勢がいい。時代劇に出た際に立ち居姿が美しく見えるよう、普段から姿勢を意識しているらしい。それを聞いたのも一度目の人生だった。

再び、失ったはずの二年間に思考を引き戻されそうになり、そっとモニターに視線を戻した。

彼は、僕にオメガに生まれた喜びを教えてくれた唯一の人だった。そして、もしかしたら、僕を殺したかもしれない人。

二度と会いたくなかった。そう思っていたことは事実。

でも、それとは異なる気持ちだが、あの暗闇の中で見た小さな光のように、胸の奥にあることも自覚していた。

第二章 時間が巻き戻ってる!?

記憶が正しければ、おそらく僕は一度死んでいる。死ぬのは、今から四カ月ほど先の話だ。「未来で死ぬ」という言い方はおかしいけれども。

一度目の人生で、僕は何者かにテレビ局の非常階段から突き落とされ、頭を強打して意識を失った。それが、気がつくと暗闇の中で子供に手を引かれ歩いていった。

途中でその子と二言、三言、言葉を交わしたことを臆げにだか覚えていた。そのまま子供はいなくなり、僕一人が出口と思われる光の中へと吸い込まれていった。

記憶にあるのはそこまでだ。次に目を覚ましたとき、最初は自分が起きているのか、まだ夢の中にいるのか、わからなかった。

目の前に広がる光景が、母と暮らしていたアパートの部屋だったからだ。高校卒業後はそこを出て、事務所の寮に入っていたはずなのに。その上、頭には痛みどころか傷痕一つなかった。

混乱した頭でスマートフォンを眺め、愕然とした。そこに表示されていたのは、およそ四カ月前の日付だった。慌ててカレンダーのアプリを開き、正確には四カ月前ではなく、二年と四カ月前だと知った。同時に、そこに書かれていた文字を見て、その日に何があったかを思い出した。

『月城プロダクション面接』と書かれたその日は、月城専務にスカウトされた翌日――すなわち、

月城プロダクションに向き、タレントとして仮登録された日だったのである。

「時間が巻き戻った!？」とありえない発想が浮かんだが、夢だと思うには二年四カ月の記憶があまりにも鮮明すぎた。特に、階段から突き落とされた瞬間の混乱と恐怖、その直後の頭が砕けたかと思うような痛みや衝撃は、思い出すだけで体が震え吐き気が込み上げるほどだった。あれが夢の中の出来事だとは、到底思えなかった。

もしかしたら、頭を打ったあと自分は死んではおらず、時間が巻き戻ったと思っている今が夢の中なのかもしれない。そう思って頬を思いつき抓ねつてみたら、涙が出るくらい痛くて、今が夢の中だとも思えなかった。

その後もしばらくは、本当に時間が巻き戻ったのか、あるいはリアルな夢を見ていただけなのか、自分でも確証が持てずにいた。見聞きすることの多くが既に記憶の中にあり、まるで自分が予知能力者にでもなったかのような既視感を繰り返すうちに、「時間が巻き戻った」というありえない結論に達した。

たとえば、オリピックで誰が金メダルを取るかとか、放送中のドラマの結末だとか。そうした世の中の出来事は、記憶の中と寸分違ちがわずに繰り返される。

けれど、自分自身に関することは、一度目と二度目では大きく違っていた。

今回は事務所と契約する際に、ベータだと嘘をついたからだ。

俳優の仕事にはやりがいを感じていたので、一度目の人生と同様に、スカウトされた翌日に事務所に向き、タレントとして仮登録してもらい、高校卒業を機に正式に契約を交わした。本来なら、

契約にあたって第二性別を聞いてはいけないことになっているが、それは就職試験の面接と同じくあってないようなものらしい。「タレントの体調管理やスケジュールを調整する上で、どうしても必要な情報なので」と前置きして尋ねられ、今回はベータだと答えた。

僕はもともと、話に聞く他のオメガほどには発情期が酷くないため、強めの抑制剤を使えば、フェロモンを誤魔化せる自信があった。一度目の人生でも、どうしても仕事を休めないときは強めの抑制剤を使い、香水で香りを誤魔化し、仕事をすることもあった。抑制剤を使うと眠気が酷くて格段に集中力は落ちる。できれば休みのほうがいいが、そこまでのハードスケジュールでなければ、どうにかやれないこともない。

第二性別を偽った一番の理由は、おそらく自分がオメガでなければ、殺されることもなかったからだ。それに、オメガであることを前面に押し出したタレントとしてのキャラ作りも、一度目の人生で後悔していることの一つだった。

他人から意にそぐわないことを言われても反論できない性格で、正直にオメガだと申告すれば、前回の二の舞になることは予想できた。生き直すのなら、今度は無理してキャラを作らず、タレントとしても素の自分でいたかった。そのためにベータと偽らなければいけないのは、皮肉な話だけれども。その分、挨拶や礼儀は一度目以上に心がけるようにした。

おかげで一度目のときにように、メディア向けのキャラを押し付けられることはなかった。その反面、事務所からの期待が薄いのは、仕方のないことだろう。

一度目はあんなに目をかけてくれていた月城専務も、今回は面接で顔を合わせて以降、一度も

レッスンを見に来てくれたことがない。専務は初めて僕に優しくしてくれたアルファで、密かに憧れの気持ちを抱いていたから、それだけが残念でもあった。

当然、一度目のときにバラエティの仕事は入って来ないし、俳優としても完全に無名。一年目はコンビニのバイトを続けながら、たまにモデルやミュージックビデオなどの仕事を回してもらい、あとはレッスンとオーディションを受けまくる日々だった。

基本的に一度目のときと同じオーディションを受けていたので、監督や演出家の求めるものはなんとなくわかる。おかげで毎回、何かしらの役はもらうことができ、端役から脇役へと徐々に出演時間も増えていった。

大きな誤算だったのは、三間晴仁との共演を回避するために選んだ次の仕事で、なぜか彼と相見えることになってしまったことだ。

NG大賞の収録後、大晦日までは何かと忙しくしていて、おかげで余計なことを考えずにすんだ。年が明けてからは、伯父の家に形ばかりの年始の挨拶に行き、その帰りに近所の神社で初詣を済ませ、あとはずっと、家にこもって台詞を覚えていた。

そうして、楽しみ半分、不安半分の気持ちで、今年の仕事始めである一月五日を迎えた。その日は、午後から今夏公開予定の戦争映画『空を見上げて』の顔合わせと台本読みが予定されており、午前中に事務所の演技レッスンに参加したのち、都内の映画制作会社のスタジオに向かった。

一度目の人生と違い、今回はマネージャーが毎回仕事場まで送り迎えしてくれるわけではない。

担当の白木さんは僕の専属ではなく、他にも何人か担当しているため、初めての現場でもないかぎり、基本、公共交通機関を使って一人で現場に向かう。白木さんからは、たまに次の仕事の相談や様子伺いの電話が来るくらいだ。

初日の今日は、白木さんも顔を出してくれた。彼が事前にマネージャー同士で話を通してくれていたおかげで、ミーティングが始まる前に、主演である中島佑美に挨拶することができた。

彼女は、深窓の令嬢のように美しく優雅な見た目に反して、さっぱりとした性格の気さくな人だった。初対面のとときの僕の失礼すぎる挨拶も、特に気にしている様子はなく、「私のことは下の名前前で呼んでね」とまで言ってくれた。

その後、監督やらプロデューサーやら、廊下で関係者を見かけるたびに挨拶していたせいで、三間に挨拶する時間はなくなってしまった。頼みの白木さんも、他の仕事があるらしく、「三間さんにもこの前のことを謝罪するんだよ」と言い残し帰って行った。

三間への挨拶を諦め、開始予定の五分前に会議室へと向かった。広々としたスペースには、長方形を形作るように長机が並べられていた。

参加予定のスタッフや役者が全員席についたところで、プロデューサーから順に一人ずつ立ち上がり、挨拶と簡単な自己紹介の言葉を述べていく。その辺りの流れはドラマの撮影と変わらない。全員が喋り終えると、台本読みが始まった。

佑美さんとその相手役である三間は、長方形の角を挟んで、プロデューサーや監督の隣のテーブルに座っていた。

彼らと向かい合う並びの末席にいる僕からは、少し顔を傾ければ二人の様子が見える。台本に集中しようとしても、無意識に視線が彼らに吸い寄せられてしまう。それはおそらく僕だけではなく、この場にいる誰もが、少なからず二人に気を取られているようだった。

今回の映画は、一昔前にあった大戦の時代を舞台にしたもので、僕も三間も兵士を演じる。役作りのためか、彼の艶やかな黒髪は短く刈り込まれていて、シャープな顔立ちにさらに凄味が加わっていた。

黒髪を肩で切り揃えた佑美さんと並んで台本を読んでいると、二人の周りだけ、まるで時代が巻き戻されたような、凜とした空気を感ずる。

三間は僕より六つ上の二十六才。佑美さんはそれより二つ上で、もともと二人は同じ事務所の先輩後輩だった。

二人の初共演は今から三年前。当時、佑美さんは既に人気女優として活躍していたが、三間はまだ無名の新人だった。新人の三間が恋愛ドラマで彼女の相手役に抜擢されたのは、彼女の推薦があったからだ、以前ネットニュースで読んだことがある。

それは佑美さんの自宅マンションでの二人の密会をスクープした記事で、彼女が後輩の三間を気に入って目をかけているうちに、男女の仲に発展したのでは——との憶測も添えられていた。

ドラマのヒットもあり、二人の交際を好意的に受け止め、応援するファンのほうが多かったらしい。「みまゆう」というカップル名までつけられていた。

その後、ファンの期待に反して、二人は続編や別のドラマで共演することはなかった。それがか

えって、「本当に付き合っているから共演NGなのは」と噂の信憑性を高めることとなった。

二人が共演NGなら、佑美さんが出演する作品を選べば、三間と鉢合わせすることはない。僕がこの映画のオーディションを受けた一番の理由がそれだった。

前半はそんな余計なことまで思い出して気もそぞろだったが、台本読みが進むにつれ、僕の出番も増えていく。主役の二人を気にする余裕もなくなった。

『あの鬼教官、怒鳴り声だけは超弩級だな』

『それがな、食堂の寿美子さんの前やと、ぼそぼそ戦車みたいに喋るさかい、毎度、えっ？』って聞き返されとるんやで』

僕と別の兵士役が台詞を続けたところで、監督がストツプをかけた。

「ちよつとその言い方だと、二人ともチャライなあ。金田はもう少し愚痴っぽく、井上はひょうきんに」

駄目出しを受けて何度か同じ台詞を繰り返したが、監督の求める水準には届かなかったようだ。

「しょうがない。じゃあ、三間君、お手本見せてあげて。陰口、愚痴、親しみを込めた軽口の三パターンでお願い。君たちはよく聞いて、次までに演じ分けられるようにしておいてね」

監督の要望に従い、三間が二人分の台詞を、声色やトーン、抑揚を変えて三通りに演じる。一度目の人生でも思ったが、普段は抑揚のない不機嫌そうな声が、演技となると爽やかに優しげにも聞こえるのが不思議だった。

三間の台詞回しを聞くと、確かに自分たちの演技には何かが足りないのがわかる。

今は考える時間がないため、台本とは別に広げていた役者ノートに、それぞれのパターンの特徴を、「ぶつきらぽう」「弾んだ」といった抽象的な言葉や抑揚を表す矢印などで書き込んだ。

注意点をすべて台本に書き込む役者も多いが、僕の場合、それだとすぐにスペースがなくなってしまうため、必ず現場に台本と別にノートを持参している。

その後も、監督の意にそぐわない部分を、「ここはこういう感情で」と解説されることはあったが、三間に手本を求めたのはその一回だけだった。

午後二時に集合し、時おり休憩を挟みながら台本読みが進み、終了したのは夜の八時を回った頃だった。そこから近くの居酒屋に場所を移し、親睦会と称した飲み会が始まった。

通されたのは座敷席で、決まった席次はなく、皆、適当に席を移っては料理をつつき、グラスを片手に談笑するような、気楽な飲み会だった。佑美さんは翌日が早朝から仕事らしく、参加していない。会議室にいる間は三間に声をかけるタイミングがなかったため、今度こそと意気込んでいたが、彼の周りは僕より一回り以上年上のベテラン俳優陣で固められており、そこに割って入る勇氣はなかった。

映画初出演の僕には知り合いの役者やスタッフもおらず、挨拶以外で初対面の人に話しかけるような積極性は、二度目の人生でも持ち合わせていない。

隅のほうで一人、ちびちび烏龍茶を飲んでいたら、頭上から声をかけられた。

「隣、いい？」

シトラス系の爽やかな香りが、ふと鼻をかすめる。

グラスと皿を手に、空いていた隣の席に腰を下ろしたのは、同じ兵士役を演じる稲垣諒真^{いながきりょうま}だった。三間と同じアプローズプロモーションに所属する俳優で、年は僕より四つ上の二十四才。オーディションのときに顔を合わせているため、会うのは今日で二度目だ。

「柿谷夏希です。よろしくお願いします」

正座をし、畏^{かしこ}まつて挨拶すると、横に広い唇が口角を上げ、ニツと愛嬌^{あいきょう}のある笑みを浮かべた。

「同期なんだからそんなに畏^{かしこ}まらなくていいよ。夏希って呼んでいいかな？ 俺のことも諒真^{りょうま}って呼んで。話すのもタメ語でいいから」

「いやでも、そういうわけには……」

お互いに俳優としては二年目だから同期と言えば同期だが、向こうは大卒でこちらは高卒。

彼もまた背が高く、日本人離れた彫りの深い顔立ちをしていて、見るからにアルファだ。でも、黒目勝ちな大きな二重の目が犬っぽくて可愛げがあり、三間ほどにはアルファ特有の威圧感を覚えない。

「今日、すごいっぱいメモ取ってたよね。台本と別にノートまで用意して。やっぱり別にノートあったほうがいいね。俺も見習おうと思った」

「それは僕がすぐに忘れちゃうからで……、気づいたことや言われたことをその場で吸収できればいいんですけど」

会話の合間にちらりと彼のグラスを見ると、すっかり空^{から}になっていた。僕は慌てて近くにあった

瓶ビールを取り、稲垣のグラスへと傾けた。

稲垣は男らしい喉仏を上下に震わせてビールを呷^{あは}り、一気に半分ほどに減らしてグラスをテーブルに置いた。

「晴さんのところに行きたいんでしょう？ 声かけてあげようか？」

烏龍茶^{ウロロンチャ}に口をつけようとしていた僕は、グラスを唇の前で止める。

「え……？」

「夏希、さつきからチラチラ晴さんのほうを見てたから、挨拶に行きたいのかと思って」晴さんとは三間のことだ。まさか三間を意識していたことを人に気づかれていたとは。

「あ、いや、その……。先月一度ご挨拶したのですが、時間がなくてただ名乗っただけになってしまったので。もう一度ちゃんとご挨拶しないといけないと思っていました……」

凶星を突かれ、あたふたと弁解する。顔が赤くなっていくのが自分でもわかる。

稲垣がぶつと噴きだし、大きな目を人懐っこく細めた。

「別に告白に行くわけでもないんだから、そんなに焦^こんなくても……。夏希って可愛いよね。オメガみたい」

更にドキッとしたが、顔に出ないよう、表情筋に力を込めた。

「稲垣さん……諒真さんみたいに男らしくないから、たまに言われます。でも、もしオメガだったら、今回の映画はオーディションも受けさせてもらえませんでしたよ。うちの事務所は、オメガは海外ロケも半裸もNGなので」

基本的にオメガはよほど売れっ子でもない限り、長期のロケも許可してもらえない。男であつても、上半身を露出させる撮影はNGだ。今回の映画ではマレーシアでのロケや上半身裸のシーンもある。

「気を悪くしたならごめん。でも、君が金田二等兵に選ばれたのもわかるよ。台本読みを聞いたなら、見た目の繊細さとは少し違つた。芯が通つてるっつか……。金田の持つ人としての強さは、十分に感じられたよ」

「あ……。ありがとうございます……」

さりげなく視線を逸らし、間を持たせるためにグラスに口をつけた。

オーディションで僕が勝ち取った役は、一度目の人生では稲垣が演じていた。

今回の映画は、特別攻撃隊——いわゆる特攻隊の兵士たちが訓練を受ける飛行学校が舞台となっている。

金田二等兵は三間が演じる陸軍中尉から教えを受け、最初はその厳しい指導に辟易するものの、厳しさが自分たちのためであることを理解し、次第に中尉に心酔していく若き兵士だ。物語の終盤では中尉も特攻に志願し、教え子たちとともに南方の海に散る。金田はそこで中尉に助けられる形で唯一生き残り、彼の最期を見届け、恋人への遺言を託される。

兵士役の中では三間に続いて見せ場のある役どころなので、オーディションに参加した全員が、この役を一番に狙っていたはずだ。まさか自分に金田役が来るとは思いもしなかったから、白木さんから結果を聞かされたときは、めちゃくちゃ嬉しかった。

ただ、この役を稲垣が演じていた世界を知っているだけに、彼に対しては申し訳ない気持ちがある。

「諒真さんと三間さんだと、アルファ同士で雰囲気为重なるので……。それで、僕が選ばれたんじゃないかと思っています」

謙遜ではなく、本気でそう思っていた。僕が選ばれたのは、演技力の差ではないだろうと。

一度目の人生では中尉も三間ではなく、別の俳優だった。日本人としては平均的な体格の、理的で温厚そうな、おそらくベータの俳優だ。今回は主役がアルファだから、脇役が表向きはベータの僕になった。それだけの違いだろう。

「確かに、俺と晴さんのツーショットだと、画面が暑苦しいよね」

稲垣が冗談めかした口調で言い、僕も安堵の笑みを零した。

お互いに駆け出しの役者で、苦労話や失敗談は尽きるほどある。三間のところには相変わらず入れ替わり立ち替わり人が集まっているので、挨拶に行くタイミングを掴めないまま飲み会はお開きとなった。

三間に挨拶できたのは、店を出たあとだった。三々五々に帰っていく監督やベテラン俳優陣を見送っていたら、最後のほうになってようやく彼が現れた。

「晴さん、夏希が晴さんに挨拶したいそうなんです、今いいですか？」

隣にいた稲垣が、僕より先に呼び止めてくれた。

三間は僕たちの前で足を止め、ともに出てきたADを見送ると、こちらに向き直った。その瞬間、

空気がひやりと冷えた気がした。彼の顔からそれまでの愛想笑いは消えていて、周囲のビルから届くネオンの灯りが、感情の読めない整った顔を一層酷薄（こくはく）に見せる。

一度目の人生では、嫌われる要素はこちらにもあったと思う。でも、今回はほぼ初対面なのに、明らかに警戒されている雰囲気戸惑いを覚えた。

思い当たる理由は、先月の中途半端な挨拶くらいだ。『まともに挨拶もできない、失礼な若手』というレッテルを貼られたのかも。自業自得なので、気持ちを切り替えてここから挽回するしかない。

「先月は本番前に楽屋に押し掛けてしまって、失礼しました。月城プロダクションの柿谷夏希です。三間さんと共演できるのを楽しみにしていました。未熟者ですが、よろしくお願いします」

先月から用意していた台詞は、緊張のせいで、役者とは思えないほど棒読みになってしまった。何度も練習したおかげで滑舌だけはよく、淀みなく喋り切って、最後にペコリと頭を下げる。

しばらく待っても返事はなく、恐る恐る顔を上げた。

僕を見下ろす顔は、物言いたげな、それでいて言葉が見つからないような、小難しい表情をしていた。

三間が出演していた秋ドラマの話でもして機嫌を取るべきか。あるいは、「次の稽古もよろしくお願いします」と笑顔を向けて、早々に退散すべきか。二つの選択肢の間で揺れ、二の句を継げずにいると、三間の唇の端がわずかに歪んだ。

口元は笑っているのに目は笑っていない。どこか薄ら寒い笑みに思えた。

続いて、右手がこちらへ伸びてくる。

「三間晴仁だ。よろしく」

思わずぼかんと口を開けて、その手をまじまじと見つめてしまった。一度目の人生では、克蘭クインのときもアップのときも、三間に握手を求められたことなんてなかったから。

稲垣から「夏希」と囁かれ、腕を肘で小突かれて、我に返る。慌ててズボンに手をこすりつけ、恐る恐るその手を握った。

同じ男同士なのに、僕の手よりも一回り大きい。それに節ばっていて、少しあたたかい。そういえば、握手したことはなくても、手を重ねたことはあったと、ふと思ひ出した。

繋がった手に、キュッと力を込められる。

シートを握りしめる手に掌を重ねられた瞬間の、もしかしたら、今だけは少しは僕のことを愛おしく思ってくれているのだろうかと思ひ出した。記憶が胸をかすめ、自分からそっと手を離した。

「夏希と話し足りないから、今から二人で二次会しようかと思ってたんすよ。よかったら、晴さんも一緒に行きませんか？」

稲垣の調子のよい声が張りつめた空気を和らげる。

助かった反面、僕にとってはありがた迷惑な提案だった。虚を衝かれたように稲垣を見た三間も、すぐには返事をできないでいる。事務所の後輩の稲垣だけならともかく、ほぼ初対面の新人との飲み直しに気が進まないのは当然だろう。一度目の人生でも、三間が誘いに乗ったのはあの一度き

りだ。

「ぼ、僕は終電に間に合わなくなるといけないから、お先に失礼します。お二人はごゆっくりどうぞ。では、お時間をいただき、ありがとうございました」

深く頭を下げ、踵を返す。結局は初対面のときと同様、逃げるように駆けだした。

「あ、夏希！ 駅まで一緒に……」

追いかけてきた稲垣の声は、聞こえなかったふりをした。

飲み会に参加していたスタツフを追い越し、向かいからぶざけ合って歩いてくる若者たちを、歩調を落として避ける。

何も考えられなかった。自分の感情にすら気づきたくなくて、夜の街を、ただひたすらに前へと足を動かし続けた。

店から駅まで歩けば十分ほどかかる距離だが、その半分ほどの時間で着いた。

顔を上げると、駅の手前にあるビルが目に入る。二階の全面ガラス張りの向こうには、煌々と照明が灯っていた。ミラーガラスなのか中の様子は窺えなかったが、窓には「グランフィットネス」という文字が浮かんでいる。その下の「深夜三時まで営業」という謳い文句に惹かれて、足を止めた。

今回の映画では、上半身裸のシーンがある。

仮にも俳優の端くれとして、痩せた薄っぺらい体をカメラの前で披露することには抵抗があった。かと言ってもともと筋肉がつきにくいいため、家で少しばかり筋トレを頑張ったところで、それなり

に見栄えのする体になるとは思えない。

ここなら撮影所から近く、稽古の帰りに寄って軽く汗を流すこともできる。

二次会を断るために「終電に間に合わなくなる」と言い訳したが、時間はまだ十時を過ぎたばかりだった。ちょうど午前中のレッスンで使ったウェアやシューズも持ち合わせているし、可能なら見学だけでもしてみたい。迷った末に、思い切って足を踏み入れた。

自動ドアが音もなく開き、明るく開放的なロビーが目の前に広がる。小洒落たソファやテーブルがゆったりと並んだスペースの奥に、大理石調の幅広のカウンターが構えていた。さりげなく観葉植物が置かれ、揃いの制服を着た三人の女性スタッフが控えている。まるで一流ホテルのような雰囲気、下調べなしで入ったことを後悔した。

駅の周りにはタワーマンションもあるし、富裕層向けのジムなのかもしれない。しかし、スタツフの一人と目が合い、「いらつしやいませ」と笑顔を向けられれば、今更引き返すわけにもいかない。勧められるままに彼女の前へ腰を下ろした。

「入会をお考えですか？」

「えっと……、ちょっと興味があって寄ってみた感じで……」

パンフレットを差し出され、『新年キャンペーン』『入会金無料』の文字に最初に目が行く。一般会員の月会費も予想外に良心的な金額で、撮影が始まるまでの一カ月だけなら払えない額ではなかった。プレミアム会員だと、専用のトレーニングルームや個人ロッカーが使えるらしいが、バイトに頼る身では手が出ない。食費を削って逆に痩せることになりそうだ。「まずは体験してみても

「どうですか？」と勧められ、見学を兼ねて体験入会してみることにした。

更衣室でジャージに着替えて二階のフロアに行くと、若い男性トレーナーが爽やかな笑顔で待ち構えていた。ポロシャツ越しでもわかる、鍛え上げられた胸筋がなんとも羨ましい。

筋肉をつけたい場所に応じたトレーニングマシンを紹介してもらい、合間に、お勧めのプロテインやタンパク質の多い食べ物、調理の仕方なども教えてもらった。

「これ、最近女性に人気ですよ。ヒップアップに効果的です」

一通り見学した後連れて行かれたマシンは、今回の撮影には必要なさそうだったが、促されるまま台に上がる。

「足を後ろに蹴る動きでお尻の筋肉を使います」

トレーナーが背後から両手で僕の腰に触れ、角度を調整した。

「お尻を意識して、ゆっくり蹴り出してください」

彼のたくましい胸板が腕に触れる距離感に居心地の悪さを覚えながらも、足を上げようとした、そのとき。

「終電に間に合わなくなるんじゃないかなかったのか？」

トレーナーとは逆の左手から、聞き覚えのある声がした。

「え？ み、三間さん!？」

立っていたのは、トレーニングウェアを着た三間だった。

「三間さんのお知り合いですか？」

トレーナーがパッと手を離し、僕から距離を取る。三間とは顔見知りのようだ。

「役者の後輩。さっきまで一緒に、飲みに誘ったけどフラれちゃって」

三間は自嘲めいた笑みを浮かべるが、僕に握手を求めたときと同じで、じっとトレーナーを注視するその目からは、どこか冷ややかなものを感じる。そもそも、二次会に誘ったのは稲垣で、誘われた三間は気乗りのしない様子だったのに。

「柿谷さんは、今日は体験入会でいらっしゃってまして」

聞かれたわけでもないのに、トレーナーがまるで言い訳するような口調で、僕がここにいる理由を説明した。

「では、マシンの説明は終わったので、僕はこれで失礼しますね。三間さんもごゆっくり」

爽やか好青年なトレーナーは、少しだけ気まずそうな笑みを浮かべ、そそくさと離れていった。

「この会員になるのか？」

問われて、慌ててマシンを降り、三間と向かい合う。

「いえ。帰り道でちよつと気になって立ち寄ったら、体験を勧められただけで……。三間さんこそ、どうしてここにいるんですか？ 諒真さんと二次会に行くんじゃないんですか？」

「あれはあいつが勝手に言っていただけだ。俺はもともと、飲み会が終わったらここに来る予定だったんだ。そのために酒も飲んでない」

トレーナーとも顔見知りだったし、口ぶりからして彼はこのジムの会員なのだろう。先ほどまで前向きに考えていた入会について、「ないな」と即決した。たとえば言葉を交わさないにしても、三

間と鉢合わせするかもしれないジムには通いたくない。

目の前の、ただでさえ不愛想な顔が、不愉快そうに眉をひそめる。

「俺がこの会員なら入会するのやめようって、顔に書いてあんど」

凶星を指されて、思わず、「へっ？」と変な声が漏れた。

「や……、ややや！ そ、そんなことあるわけじゃないですか！」

「じゃあ、入会すんのか？」

「い、いや、それは、その……、ここはちよつと家からは遠いし、会費も、僕のような駆け出しからしたらお高めでしたし……、会員になる可能性は低いと思います」

言葉を選びながら喋ったせいで、あからさまにしどろもどろだった。目も泳いでしまっている。

立ち話している僕たちの横を、中年の男性が怪訝そうに眺めながら通り過ぎ、近くのマシンに座った。それを機に話を切り上げたかったが、「こっちへ来い」とでも言うように三間に顎で示され、仕方なく後をついていった。

フロアの壁際に置かれたベンチまで行き、三間は腰を下ろした。三人掛けのベンチで隣は空いている。トレーニングジムで三間と腰を落着けて話をする理由のない僕は、椅子には座らず、三分ほど距離をおいて彼の前に立った。

座った三間に見上げられる形で、それはそれで気分が落ち着かない。

「もう十分に見学できたので、僕はこれで失礼します。三間さんは……」

どうかごゆっくりトレーニングを続けてください——そう続けようとして、途中で遮られた。

「何食ったら、そんなにガリガリになるんだ？」

今度は構えていたから変な声を漏らさずにすんだが、すぐには言葉が頭に入って来なかった。二、三回、言われた言葉を反芻し、食べ物のことを聞かれているのだと理解した。

何を食べたら痩せられるか。そんなの僕に聞かなくなつたって、今の時代、ネットに腐るほど情報が溢れている。……そもそも、三間は痩せたいのだろうか。全然太つてもいいのに。

「なぜ……、僕にそんなこと聞くんですか？」

尋ねる声に、意図せず不快感が滲む。

三間は一瞬、考える素振りを見せた。

「知りたいから」

返ってきたのは、答えとも言えない答えだった。

喜怒哀楽に乏しい表情からは、後輩と他愛ない会話を楽しみたいくて質問したわけではない感じが取れる。かといって、太らない食事について、本気で知りがっているようにも見えない。

今度は僕が考え込む番だった。

「……三間って……、そんな人だったっけ……？」

その違和感には、覚えがあった。

年末の特番の収録で楽屋に挨拶に行ったあと、遅れて戻って来た白木さんが、なぜ僕が今回の仕事を選んだのか、三間に聞かれたと言っていた。あのときも、彼がそんなことを気にする理由がわからなかった。

僕も人と関わることが苦手なほうだが、一度目の人生では、僕以上に三間のほうが、人を寄せ付けない雰囲気があった。

一度目の人生で三間と共演した学園ドラマでは、三間と僕は先生と生徒役で、僕はメディアの前で演じていたキャラそのものの「あざと可愛い系男子」という役どころだった。

事務から、対外的には三間と仲が良さそうに振る舞うよう言われていたので、雑誌の取材や番宣で出演したバラエティ番組では、ドラマのノリでボディタッチをしたり、媚びるような態度を取ったりもした。人前では三間も合わせてくれていたものの、嫌がつているオーラはなんとなく感じ取れた。そのため、仕事以外では極力近づかなかったし、向こうからのアプローチもなかった。あの夜を除いては、プライベートで会話らしい会話をしたこともなかった気がする。

少なくとも一度目の人生では、三間からとりとめのない会話を振られたり、興味を持たれることなく、ありえなかった。

そんな男と、スポーツジムでなぜか食べ物の話をしている。

まるで犯人を尋問する刑事のような鋭い眼差しに困惑しつつも、質問の答えを口にする。

「おからです」

聞き取れなかったのか、あるいは言葉の意味を理解できなかったのか、三間が怪訝けげんそうな顔をした。

「朝昼晩、おからばっか食べてたら、僕みたいにガリガリになりますよ」

自分でも、声こゑが棘とげを帯びているのがわかった。

筋肉がつきにくいのは、オメガの体質のせいもあるだろう。でも、それだけでなく、成長期に満足に食べられなかった影響も大きい。特に母が亡くなってからは、商店街の豆腐屋で無料でもらえる「おから」が主食でもあり、副食でもあり、貴重な栄養源だった。

食べるものに困ったこともない人間に「何を食べたなら痩せられるか」と聞かれるなんて、貧乏を馬鹿にされているとは思えなかった。

「おからって豆腐を作るときに出る粕かすのことだよな？ 朝昼晩食べて飽きねーの？」

僕の苛立ちを知ってか知らずか、三間は質問を畳みかけてくる。その口調があまりに自然体だったから、完全に毒気を抜かれてしまった。

意図はわからないが、痩せる方法を知りたがっていることは本当のようだ。

「それは……、料理で工夫すれば、それなりに。ご飯や小麦粉の代わりにもなりますし。ネットを見れば、いろんな調理法が載っていますよ」

三間は顎あごに指をあて、ふむ、と呟つぶいた。

「ネットに書いてあっても、俺は料理しねーからな」

彼女に作ってもらえば、と言おうとして言葉を呑み込む。三間の彼女は人気女優の中島佑美だった。料理をする時間なんてないだろう。

「監督から、撮影までに筋肉を落としてほしいと言われているんだが。つけるよりも落とすほうが難しい」

僕は、はあ、と曖昧な相槌あいづちを返した。